

Umbrellas, Strawberries and Cream



寺澤 盾

昨年の全米オープンテニス選手権での錦織圭選手^{にしこりけい}の活躍を記憶されている方も多いかと思いますが、今年に入ってから全豪オープンなどで安定した好成績をおさめています。主なテニスの国際大会には、全米、全豪のほかに全仏と全英があり、この4大会はほかの大会よりも格が高くグランドスラムと呼ばれています。全英は一般にはウィンブルドンとして知られており、4大大会の中でももっとも権威があります。

ウィンブルドン選手権は毎年6月最終月曜日から2週間の日程でロンドン郊外のウィンブルドンのAll England Lawn Tennis and Croquet Clubで開催されます。lawn tennisという名前からわかるように、コートはすべて芝生で、とくにメインコートのセンターコートは、年一度の大会時のみに使用され、それ以外の期間は芝の養生にあてられています。会場となるクラブ名にあるcroquet（クローケー）はテニスと同じ芝コートで行われるスポーツで、「ゲートボール」と似た競技です。『不思議の国のアリス』でアリスが「はりねずみのボール」や「フラミンゴの槌」で悪戦苦闘してプレーしているのはこのクローケーです。

さて、ウィンブルドン大会が催される期間はWimbledon fortnightとよばれます。fortnightはfourteen night(s)が約まった形でイギリスでは「2週間」を意味する単語としてよく聞かれます。大会の中日である日曜日（Middle Sunday）は休養日としてプレーは行わないという伝統があります。ウィンブルドンにまつわる面白い英語表現としてはほかにWimbledon effectがあります。ウィンブルドン大会は全英という名前からうかがえるように、もともと英国人を対象にしたものでしたが、他国の選手にも門戸を広げた結

果、自国選手が優勝できなくなった現象を指します。1936年のフレッド・ペリー（現在ではスポーツウェアのブランドとしても知られている）の優勝から2013年のアンディ・マレーまで実に77年間、英国人男子選手の優勝がありませんでした。これに倣うと、モンゴル勢などの外国人力士に席卷されている大相撲の現況はRyogoku effect? と呼べるかもしれません。

私も10数年前イギリスに1年間滞在していたとき、ウィンブルドン大会を観戦する機会がありました。大会が催される初夏は長く暗い英国の冬を過ごしてきた人々の心が浮き立つ季節で、まさにこうしたお祭ムードの中で「テニスの聖地」へ足を運んだことを覚えています。当時は、メインコート以外のコート（グランドコート）でしたら当日券を買うことができました。

初夏とはいってもこの時期のウィンブルドンは雨が多いのですが、イギリスでは日本のような長雨はあまりないので雨が降ってもしばらくすれば晴れ間がのぞくのが普通です。観戦に来ている人の多くは本や雑誌などを携えていて、雨が降ると傘をさして本を開きゆったりと雨の止むのを待っています。雨降りはウィンブルドン観戦の楽しさの一部になっているようです。2009年からセンターコートには開閉式の屋根が設置されましたが、ウィンブルドンの伝統が一つ失われたようで少々寂しい思いがします。

傘とともにウィンブルドン観戦に欠かせないのが、strawberries and cream（イチゴに生クリームをかけたもの）です。これをいただきながら錦織選手の試合を観戦する日を夢見っていますが、大学教員も一般サラリーマン並みに忙しくなった昨今では夢に終わりそうです。（てらさわ じゅん・東京大学大学院教授）

編輯部

こうした、海外で通用するグローバル人材の育成に関する政策が、2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて次々と示されている今、高校現場で押さえておきたいトピックを、気になるキーワードをもとに紹介する。

グローバル人材育成と英語の授業

石森広美



昨今、「グローバル人材」育成の必要性が叫ばれている。勤務校は宮城県で唯一のスーパーグローバルハイスクール（SGH）指定校であり、教科横断的な探究学習である「課題研究」を中心に、グローバル人材を育てるべく、様々な実践が行われている。

全生徒に地球市民としての素養を持たせるには、学校全体の取り組みに加え、平常授業においても生徒に思考力・表現力・判断力やコミュニケーションスキル、課題解決力などが育まれるよう、教授・学習方法などに工夫を施す必要がある。英語の授業においては、異文化への寛容や積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度、世界への関心などの育成も重要である。

本稿では、筆者の実践を支えてきた国際理解を軸に、教科書で4技能をバランス良く育て、グローバル人材育成にも寄与しうる授業のあり方について考察する。

＜＜英語教育と国際理解

多くの人にとって英語の授業は、世界へ目を開ける入り口である。授業において英語学習と国際理解を結合させることにより、国際問題への関心を高め、当事者意識や共感の心を育てることが大切である。英語の授業で育成すべき総合的コミュニケーション能力の構成要素には、言語能力や方略能力などの運用能力のみならず、異文化受容や共感的理解などの態度・姿勢や世界の様々な事柄についての知識や考えも含まれる（村野井仁『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館書店、2006年）。英語教育は言語運用能

力の養成とともに、地球市民としての対話と共生を推し進める営みを包摂するものと考えている。

そうした基本姿勢で教科書をフル活用し、内容に関心を持たせながら4技能をバランス良く育てよう授業を工夫する。ことばの運用において4技能はそれぞれ切り離されることはなく、習得過程においても、すべてが連動することで語学力を伸長させ、最大限の効果を生み出すことができる。

＜＜世界に目を開かせるコミュニケーション英語

教師の着眼点や切り口次第で、英語の教科書はグローバル人材を育む場となる。コミュニケーション英語の教科書には、異文化のみならず、平和、環境、人権、開発等の地球的な課題なども多く扱われている。とりわけ *Genius English Communication* は心に響き、生き方を考えさせるような、生徒に読ませたい内容にあふれており、良質な国際理解・人間教育のテキストともいえる。例えば、*Genius I* では、100人村から見える世界の格差、ボルネオの熱帯雨林の破壊、ホロコーストから考える人権・平和、命、フェアトレード、水危機、ボランティア活動など、グローバルで良質な題材に富んでいる。これを単に新出単語や構文、文法を教えるだけのツールにするのはもったいない。内容理解を深めさせ、問題の背景や解決法を考えさせる内容重視の教授法により、生徒に国際的教養と自分の考えを持てるよう支援したい。

授業の流れは、概ね次の通りである。まず、教科書の本文をCDで聞き（Listening）、読解し（Reading）、英語のQ&Aなどを通して内容理解

を確認する。さらに CD を繰り返し聞きながら (Listening), 異なる形式 (教師の後や CD の後に続いての一斉リピート, 個人練習, ペア練習, ペアチェック, Read & Look up など複数の技法の組み合わせ) で何度も音読する (Speaking の土台)。内容を理解した後に, 重要構文を活用して, 自分のことについて作文させ, ペアで話させてみる (Writing, Speaking)。また, 各パートや単元の終わりには, その題材からの学びを振り返らせ, 自分の意見を一定量英語で書かせ (Writing), ペアでインタビューし合い, 全体でも発表させる (Speaking)。授業では教師の指示や説明はほぼ英語で行われるため, 生徒の Listening 活動は常に進行している状況である。

例えば, “A Village of One Hundred” (L1) は, 世界の貧富の格差などを紹介している。主な言語材料は, to 不定詞や形式主語 it の用法である。構文や文法事項を含めながら言語活動を行う際, 本文の内容を踏まえ, It is very important for every child to have a school education. / To live without safe drinking water is impossible. It is necessary for us to have access to fresh water. といった文章を提示, 生徒にも作文させた。また, 教師の問いに対する内容についての意見交換なども多様なスキルの統合に役立つ。

〈Questions 例〉 What surprised you most about the story? Why? What will you do about it?

〈実際の生徒の回答例〉

● I was surprised that the poorest fifty in the village share only 1 % of the wealth. I think that people living in the village are not fair. I think people should live in the world equally.

● I was surprised that three children in the village will not live to see their fifth birthday because I thought children usually live without difficulties. I want to tell this problem to many people. If more people know this problem, we can volunteer for children. (以下略)

また, 日本文化の風呂敷の良さと「もったいない」の精神を扱った “More Than Just a Piece of Cloth” (L3) のまとめの活動では, 生徒に既習表現を用いて外国人に風呂敷の魅力を発信するスピーチをさせた。

〈実際の生徒のスピーチ例〉

● *Furoshiki* is a square cloth. It is used for wrapping, storing and carrying things, so it is very useful. Today, it has evolved into stylish cloth with various patterns. By the way, do you buy plastic bags in a supermarket? Plastic bags lead to global warming. *Furoshiki* can take the place of plastic bags, because we never throw *furoshiki* away. *Furoshiki* is a Japanese culture. We have to be proud of it and Japanese idea of *Mottainai*. I want to treasure them and use *furoshiki* a lot.

以下は環境問題を扱った “Borneo’s Moment of Truth” (L4) からの気づきをまとめたものである。

● I think that it is very important to protect biodiversity. I knew using a lot of palm oil in my life, but I want to reduce the amount of products made from palm oil. And I would like to know about wildlife situations in the world, because understanding it is the only thing that I can do now.

*

課末には Discussion や Project も設定され, 教科書の題材を基に考えを深め, 表現するよう設計されている。教科書を使いこなすことで, 4 技能のすべてを無理なく取り入れ, 統合させることができるだけでなく, 国際理解を深め, グローバル社会に必要とされる様々なスキルを涵養できる。適切な資料提示やタスク, ワークショップ等も取り入れれば, より学習効果が高まる。SGH としては, “Water Crisis” (L8) は本校の研究テーマ「世界の水問題の解決への取組」と関連が深く, 背景知識を学ばせるのにも大いに役立った。英語 (外国語) の授業が生徒の豊かな学びを促し, 世界の平和と共生に少しでも役立つものでありたい。 (いしもり ひろみ・宮城県仙台二華高等学校教諭)

“Share Your Ideas.”—4技能を使った言語活動

子安圭子



◀・・「読む」から“Share Your Ideas.”へ:Genius I

Genius English Communication I を採択して2年目となる今年度は3人の担当者の間でまず「できる限り英語で授業をすること」を確認して始まった。自学自習用の「学習ノート」は、生徒がそれぞれのペースで理解を確かなものにするのに大変役立っている。さらに授業の目標を“Read Actively, Think Critically”とし、生徒にも読んだ後に必ず自分はどう考えるのか人に伝える活動まで行うということを伝えた。

レッスンの最初の授業では教科書課末の“Communication Activities”にあるコンセプト・マップを配り、最後まで通して話を読むことを習慣づけた。クラスによってはさらに空所を増やしたものに、教科書を閉じてCDを聞きながら書き込みをするというリスニングとノートテキングの練習を兼ねたものにした。2学期には読みながら、あるいは聞きながら自分でコンセプト・マップを書く活動へと発展させた。マップは学習後の要約にも使う。

中学の時と教科書も授業のスタイルも変わるので、生徒に早く授業のスタイルに慣れてもらうために1学期は“Reading”, “Share Your Ideas”, “Express Yourself”の3つのセクションから成るプリントを用意した。

“Share Your Ideas”というセクションは教科書の“Discussion”を参考にして作った。たとえば, Some children will not live to be 5 years old in some countries. What can people do in order to improve this situation? (L1) や, Do you yourself use ‘furoshiki’? If not, have you

seen your family use ‘furoshiki’? (L3) などである。最初は課題として書いてきたものを次の授業で席が近い者同士で発表させていたが、慣れるに従い、その場で考えて発表することとした。時間があれば、友達と話したことを書いてまとめたり、さらにクラスで発表したりもした。

“Express Yourself”は、新出表現を使って身近な、意味のある例文を作る活動である。たとえば新出表現“what’s worse”を使って、1. Write something that actually happened to you, and tell it to your partner. 2. Listen and write what had happened to your partner. (L3) という課題に取り組みせ、その後何人かの生徒を指名して、2.で書いたことを読み上げさせた。

何かを読んだら、考える。考えたら、話す、または書く。書いたら話す。聞いたら書く。これらの活動を通じて“Share your ideas.”という言葉は合言葉のように繰り返して使われ、生徒もすぐに反応し、活動を楽しむようになった。2学期にはこのためのプリントは不要になり、“Share ...”の活動は課ごとのプロジェクトへと発展した。

◀・・プロジェクト

ボランティア活動を扱う“Alex’s Lemonade Stand” (L5) では、Plan Your Own Fund-Raising Campaign というプロジェクトに取り組んだ。生徒は自分でできるチャリティ活動を考え、用紙にPurpose of the Campaign / How will you raise money? / Location等を記入する。生徒には自分で考えるだけでなく人に働きかけることも考えてほしいので、How will you advertise your cam-

aign? という項目も入れ、ポスターも描いてもらった。きちんと取り組んだ、いい「作品」が多く、掲示すればよかったと反省している。

◀・多読の取り組みを発表につなげる

教科書を使つてのプロジェクトと平行して、中学3年で行っていた多読の取り組みの継続を目指して Bookworms Club (Oxford University Press) の1冊を夏休みの課題とした。このシリーズは役割シートを使ってディスカッションを進行できるようになっている。グループごとに好きな短編を選び、作品の理解に重要な言葉を探し説明する Word Master や、作中に見られる文化的背景を探す Culture Collector など、一人一役で準備をし、話し合いをした後、作品が映画化されその宣伝をするという設定でグループ発表をした。映画の一場面や主演俳優と監督へのインタビューを演じたグループや、パソコンで予告編を作ったグループもあり、発表の時は大変盛り上がった。準備中、納得がいけない部分があると作品を何回も読み直しては考え、話し合う姿があちこちで見られたのがうれしかった。

3学期には友達に勧めたい本を1冊持ってきてグループ内で紹介をしてもらった。聞いている人は必ず何か質問をし、紹介者はその場で答えねばならないというルールを伝えてあったせいか、発表者と聞く人が同じ気持ちで活動を“share”し、作り上げていたように思う。

◀・Genius I を通じて世界の問題を知る

Genius I の採択の理由の1番が「教材の豊富さ」だったので、週2時間で取り組むのは大変だったが、「どのレッスンもカットしない、教科書後半に収録された本課と同じテーマの英文を読む Read On! は、スキミングなどの速読演習として扱う」という方針で授業計画を立てた。課末の“Give It a Try”は「文法習得のためだけの文法問題」ではなく内容の伴った、かつ取り組みやす

い練習なのでその場で答えを考えさせている。コラム“Sound Training”は、クイズ風で生徒にも好評だった。

生徒は次の学年にも読んでもらいたい話として“Alex’s Lemonade Stand”, “Life in a Jar”, “How the Brain Works”, “Coffee and Fair Trade”を選んだ。これらはすべて2学期以降に読んだものである。内容の魅力に加え、プロジェクトを通じて生徒たちが主体的に取り組んだことの影響も大きいのではないかと思われた。

生徒は Genius I を通じて世界の問題を知り、またその解決のために働く人の存在について知ることができたようである。最後の授業では世界の諸問題と解決の方法、そこにある共通の問題点と私たちに求められる姿勢をグループで協力して一枚のマップにまとめ、Genius II への学習につなげたいと考えている。

◀・発信につなげる Genius II

IIになると内容も難しくなり、どのクラスでもすべてを同じように扱うことは難しくなるようだが、ディスカッション、プレゼンテーション、スピーチといった様々な方法で何らかの活動を取り入れている。たとえば異文化理解を扱う“Learning Language, Learning Self”(L2)では My Experience of Encountering a Foreign Culture というテーマでスピーチをし、“Michael J. Sandel on Kant”(L9)では、自分が選んだ題目(justice, peace, equality, love, happiness)について、visual aid を使いながら、一般的な定義、身近な例、自分のメッセージを語った。

Genius II は input の題材として本文の内容が高度で優れているので、すべてを教師が授業で網羅するのではなく、生徒に自分の言葉で友達にわかりやすいように工夫して解説する機会を与えることで発表者も聞く方もお互いに理解が深まる喜びを共有できたと担当者は語っている。

(こやす けいこ・白百合学園中学高等学校教諭)

内容理解とアウトプットをつなげる授業を目指して

中田典子



Genius English Communication I, II の特徴は、英文の量の豊富さ、原典を活かした英文、トピックの面白さですが、初めてこの教科書を手にしたとき「なるほど」と思ったのは、課末の Summarizing のチャート（「コンセプト・マップ」）とそれをもとにサマリーを書く・話すという流れでした。新学習指導要領のもと4技能の育成を目指す授業へと変わる中で、訳読を介さずある程度複雑な英文を正確に読むスキルの育成と、読んだり聴いたりして理解したものをアウトプットへつなげるヒントがそこにあると感じたからです。

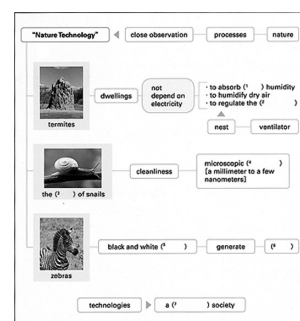
＜＜チャートを活かすCAN-DOリスト

本校のCAN-DOリスト（到達目標）のリーディング、スピーキング、ライティングに、このチャートを利用した要素を加えました。リーディングでは、「1年：教科書にある説明文や伝記文を読んで、表やチャートを完成させることができる」、「3年：教科書になる説明文や評論文を読んで、論の展開を表やチャート等に表すことができる」、スピーキングでは、「1年：教科書で読んだ英文の内容・要約を、チャート等を見ながらリテリングすることができる。内容についての感想を5文程度で話すことができる」、「3年：教科書で読んだ英文の内容・要約を、自分が作ったチャート等を見ながらリテリングすることができる。その内容について5分程度の会話をすることができる」としました。また、ライティングでは、1～3年に「教科書レベルの英文の要約を、キーワードを見れば書くことができ、それに対する自分の意見・考えを書くことができる」を到達目標と

しています。

＜＜理解⇒図式化⇒アウトプット

Genius II の英文理解の段階では、ほぼ原典の英文を生かした本文という特徴を活かし、ジャンルや著者のスタイルに合った活動を取り入れることを心掛けています。教科書のチャートの完成だけでなく、生徒が表を作ったり図を描いたりすることで理解をしながら読みすすめる活動を何度か取り入れました。



Lesson 3 課末のチャート

「Nature Technology」(L3) では、教科書にあるシロアリ、カタツムリ、シマウマの例について、「動植物の名前」「住んでいる場所」「特徴」「可能な使用方法と解決可能な課題」の項目に分けた表に英語のキーワードを記入していきます。「動植物の特徴」の項目には、英文で説明されている内容を図で描きます。Post-reading 活動として、表の4例目に、「ネイチャーテクノロジーデータベース」(<http://www.naturetech-db.jp/>) から自分が選んだ例について日本語で読み、それを表に英語で記入、その表を基に英語で説明するスピーキング活動を行いました。

「Emotions Gone Wild」(L8) Part 3 は、動物の primary emotions と secondary emotions について、対比的・相関的に書かれているパートです。対比を明らかにする表を完成させながら読

み、読解が難しいくだりについては一連の流れを図に描くよう指示をしました。（その図を見ると生徒の理解度が一目でわかります。）その後、その表と図を使い、2つの感情の関係を自分の英語で表現するスピーキング活動を行いました。

◀・ジグソー法：インプット⇒アウトプット

情報量やトピックによって、ジグソー法を使うこともあります。ジグソー法は、クラスを例えば10人（A, B, C, ... J）×4グループに分け、各グループに異なる情報（英文）を与え、グループ内で協力して情報（英文）を正確に理解し、その情報を英語で説明できるようにします。次に各グループのメンバー A, B, C, ... J を集めて4人から成る班（メンバーA 4人×10班）を作り、それぞれが持つ情報を英語で説明します。そこへ問いを与え、それに対する答えを話し合い班ごとで答えを出す、という方法です。

“Emotions Gone Wild”（L8）で、本文を読み始める前にジグソー法を利用しました。この課では、動物がお互いを思いやる感情を持つとされるケースが4例紹介されています。4つのグループにこのケース（それぞれ教科書で7行程度）のうち1つを与え、グループで内容を理解した後、パラフレイズしたわかりやすい英語で状況を説明する練習をします。その後、組み直した4人の班でそれぞれのケースを英語で説明し、4つの情報がそろった後で著者が伝えようとしていることを班で推測し、英語で発表します。

この方法の利点は、多量のインプットが可能であること、他者に正確に伝える責任を生徒が感じることができ、インプットからスピーキングへつなげることができることです。複数のケースやデータを知る、複数の視点や立場から分析するときにこの方法は有効です。教科書巻末の further reading 教材 Read On! の、“When in Uganda...”（RO2）や“World Heritage Sites in Japan”（RO6）等でも利用できるのではないかと思います。

す。

◀・インタビューテストによる評価

コミュニケーション英語の授業では、ほぼ毎時間生徒同士が英語で話をする場面を設けています。その活動を評価するため、2年生の2月にインタビューテストを行いました。先に“Emotions Gone Wild”（L8）の Post-Reading 活動として、動物が感情を持っていると思うか、なぜそう思うかについて生徒同士のインタビューをしました。続けて、動物をめぐる controversial issues を5テーマ与え（動物へのテスト、捕鯨、ツキノワグマ捕獲、象牙取引、クローン）、生徒同士でインタビュー活動をしました。その後、インタビューの内容は「レポート＋自分の意見」の形でライティングにします。

その活動を踏まえ、インタビューテストは一人5分、自分の選んだテーマについて1～2分意見を述べ、教員がその内容について質問し、さらに生徒が選ばなかったテーマについても質問をする形で会話をします。評価は4点×5項目のルーブリックを使います。ルーブリック表は生徒へあらかじめ渡し、それぞれ到達目標を意識しながらテストに臨みます。評価はその場で行い、ルーブリックのディスクリプタに沿って、今回できていたこと（十分な情報量があった、アイコンタクトができていた等）と、改善すること（繰り返しの表現が目立った、th の発音に気をつける等）を伝えます。

英語で行う授業や生徒同士が英語で話をする機会を単発的に持つだけだった2年前に行った、同様のインタビューテストと比べると、「流暢」に「十分な情報量」を「多様な表現」を使って話せる生徒が増えました。スピーキング力を測ることについて難しい点がありますが、理解⇒アウトプットの流れを2年間継続的に経験してきた生徒に見られた変化は、大変励みになるものでした。

（なかだ のりこ・鳥取県立鳥取西高等学校教諭）

Compassを使った生徒の発話を促す授業

河上昭恵



Compass English Communication のテキストは生徒が主体的に動くことができる活動を取り入れやすいよう工夫されています。教科書の構成が見開きで見やすく、生徒の興味、関心を引くような写真や絵が数多く掲載されています。それらの視覚材料を活用することで、本文の内容理解および定着活動を、英語のみで進めていくことができます。また、本文対向ページの Answer it! で英文の内容理解を深め、Focus on it! 等では文法項目を理解し、課末の Enjoy communication では自己表現活動を行うことができます。その結果、4技能を取り入れた生徒の活動量の多い授業を作っていくことができます。私が授業を作る際に最も心がけていることは、まさに生徒の活動時間を多くし、主体的な学びを促すことです。そのために行っている、帯活動、本文理解のためのオーラル・インタラクションとプレゼンテーション活動、そしてタスク活動について、1つの課を取り上げ実践事例をご紹介します。

題材 Lesson 3 Kimonos are Cool!

＜＜授業の流れ

導入（語彙定着のための帯活動）（5～10分）



本文理解のためのオーラル・インタラクション（10～15分）



本文内容の解説（10分）



音読（10分）



プレゼンテーション（10～15分）

＜＜導入（語彙定着のための帯活動）

Lesson 3 は着物文化をきっかけに日本の伝統・文化について興味、関心を持ち、日本文化を紹介することを目的としています。教科書には着物の写真や夏祭りのイラストなどが載っています。そこで、導入活動として日本の伝統・文化について紹介する活動を行いました。

まずは語彙の定着活動として、着物の柄に使われる朝顔などの花、夏祭り、屋台、うちわやお面などを英語でどのように表現すればよいのかを知るために、カルタ取りのような活動を行いました。生徒を4～5人のグループに分け、それぞれの机の上にイラストと英単語（例えば朝顔の絵と morning glory という英単語）が書いてあるカードを置き、英語の説明を聞いて答えとなるカードを取っていくという活動です。単語の種類やヒントの難易度を上げながら、授業の最初の導入活動として毎回10分程度行いました。

語彙が定着した後は、Enjoy communication の自己表現活動を行いました。生徒たち自身が日本の伝統・文化について調べてクラス全体に英語で説明し、聞いた人は何の説明かを当てて答えていくというクイズ形式の活動です。毎回数名ずつ何回かに分けて行いました。

これらの活動を通して、自分の身の回りにある日本の伝統・文化への興味、関心を高め、語彙を増やし、説明方法についての知識を増やすことができます。

＜・・本文理解のためのオーラル・インタラクションとプレゼンテーション活動

導入の後には本文のオーラル・インタラクションを行います。絵やカードを黒板に貼りながら、本文の内容を英語で説明します。その際には新出単語を取り入れたり、Answer it!のQ and Aを中心に、生徒に質問をしたりして、内容が理解できているのかを確認しています。また、定着させたい単語や文法事項の入った文を何度も繰り返し発話させています。生徒にはこのオーラル・インタラクションの活動で本文の流れをしっかりと理解し、口頭練習を十分にしておく、後で行うプレゼンテーションがうまくできるようになることを理解してもらっています。

そして、毎回授業の最後に、学習した内容のリテリングをペアによるプレゼンテーション活動として行っています。黒板に貼ってある絵や単語を参考に、学習した内容の概略をクラス全体の前で発表してもらいます。ペアでプレゼンテーションをする際は、自分たちで要約文を作成し、原稿は持たずに行うことをルールとしています。

＜・・タスク活動

タスクによる自己表現活動は1レッスンごとに1回程度行っています。その際に有効なのが、Enjoy communicationです。Lesson 3は海外からの留学生に話すつもりで、日本文化を紹介してみようという内容が設定されています。この活動自体がタスクの活動になっているのでそのまま行うことができます。今回はより生徒にとって身近な活動にするために、実際に本校に勤務している外国人講師に、日本の伝統や文化を感じてもらえるような、学校の近くにある観光スポットを紹介しましょう、というテーマを設定しました。4～5名のグループに分かれて、何について紹介するのかを決めるために英語による話し合いを行いました。

話し合いを進める際には、司会、書記、発表者

等あらかじめ役割を分担し、全員から意見とその理由を聞いて話し合いを進めるように指示をしています。

話し合いの後には絵や写真を用意してのプレゼンテーション活動を行います。プレゼンテーションは実際に外国人講師に聞いていただき、一番行きたいと思った場所はどこなのかを含め、講評をしていただきました。

事前に帯活動で語彙の定着が図れているため、生徒も英語による話し合いを進めることができます。また、毎回の授業でプレゼンテーション活動(リテリング)を行うことで、必要な表現方法も定着しているため、同じようなテーマの話題についてその場で話す内容のタスクを入れても、英語のみの使用で行うことができます。そして、身近な人や地域を対象にすることで、より具体的なイメージを持って、自分が話したいことを話す活動に結び付けていくことができます。

＜・・生徒たちの反応

授業後にこれらの活動についてのアンケートを行いました。帯活動、本文理解のためのオーラル・インタラクションとプレゼンテーション活動、タスク活動については、8割近くの生徒が肯定的な評価をしています。生徒の感想は、日本の伝統・文化を通して英語を学べて楽しかったしわかりやすかった、普段から身近にあるものを話すのがこんなに難しいとは思わなかったけれど、自分で考える力がついた、英文を読んだり、自分で文章を考えたり、発表したりして英語を使うことが楽しかった、などです。

生徒たちは教科書で学んだことを題材にしながら、身近なものについての語彙をさらに増やしたり、自分の意見や考えを表現することができたことで、学習意欲が高まり、楽しみながら英語を学んでいます。以上が私の実践事例です。ご参考になれば幸いです。

(かわかみ あきえ・東京都立葛飾総合高等学校教諭)



教科書を学び，教科書で学ぶ

深澤邦洋

Compass English Communication II は，各課 8 回の授業で学習を進めていくことを想定して構成されていますが，私は，教師の目から見て，生徒の意見を引き出しやすいと思われる題材，しっかり理解した上で表現力を高めさせたいと思われる言語材料などに応じて，弾力的に時間配分して授業を構成しています。また，各回の授業は，「聞く・話す・読む・書く」という活動のどれかに比重を置いて展開しています。「主体的に考え表現する力を伸ばす」を意識して授業計画を立てると，結果として「4 技能をバランスよく伸ばす」につながるのではないかと考えています。

＜・・知っている（はず）を聞く

“Takuya’s Adventure in Canada” (L2) は，留学した卓也がカナダの多文化社会に触れ，現地の高校の授業を体験することで，自分たちの社会に関心を持つことや言葉でコミュニケーションすることの大切さを学ぶ様子を描いた説明文です。

この課の TT 授業では，カナダ出身の ALT が州ごとの特徴や見どころ，教育制度など，本課で紹介されている以上の情報を紹介してくれました。「聞く」に比重を置いた学習です。生徒は ALT による英語での説明は初めて聞くのですが，実はカナダ大使館発行の『カナダ留学ガイド』を事前に読んでいて，内容の大半はすでに知っている（でもほとんど忘れかけている）ものでした。

聞いて理解する訓練の初期段階では，既知情報を英語で聞いて理解できたという達成感を演出することが関心や意欲の向上に役立つと思います。

＜・・読んだ後に話し合う

“Architect in Action” (L6) は，国内外で活躍する安藤忠雄さんの，建築家としての哲学，職業選択の経緯，影響を受けた世界の建築，自然環境への思い，若者へのメッセージが書かれた，自伝的エッセイです。自分自身の将来の生き方や職業について考えたり英語で話し合ったりするのに適した題材ですが，私は「理想の住宅」というテーマに絞って，授業を展開してみました。

まずは，インターネットを使って様々なデザインの住宅画像を見ながら，デザイン名や分類などの語彙を増やし，次に ALT によるスピーチ（モデル提示）を，画像を見ながら聞いて理解します。



If I could have a house anywhere, I would like to live in the countryside but near the city. I like living in quiet places, but being near a city would be convenient.

I would like to live in a traditional Japanese style house, but with thick walls to keep warm. I would also like to have a big garden and a koi pond. I think that my whole family could feel relaxed.

(73 words)

その後，5～6 名でグループを作り，1 人は営業マン，1 人は住宅デザイナー，残りは施主家族となり，営業マンは施主家族に① Where do you want to live, and why?, ② What style of house

do you want to have?, ③ As a special equipment, what do you want? を問いながら、やりとりを書き留めます。デザイナーは施主家族が語る希望を元に perspective drawing (外観パース) を描きます。最後に、施主家族代表が、営業マンのメモとデザイナーの絵を使ってクラス全体に show and tell, という展開です。

グループワークにおけるやりとりで、事前に語彙を学習してあるので①②まではスムーズに進みますが、③は、施主家族内の要望も様々で、その場で和英辞典を引きながら、solar panel, basement, swimming pool, penthouse などの語彙を見つけ出していました。また、選んでいいのは1つだけという条件にしたので、それなりに説得力のある理由を語り合っ合意形成に至るのにも苦労していました。

ペアやグループで、英語を使って活動する場面を設定する際、どんな話題なら話しやすいか、どういう展開なら進めやすいかなどに配慮すると、「主体的に考え表現する力を伸ばす」学習環境が整うと思われます。要は、発問の工夫が肝心ということなのです。

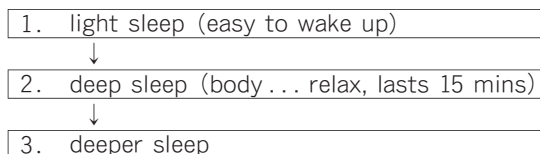
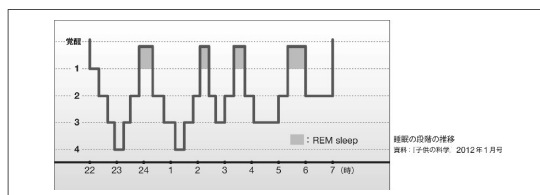
◀・図表に整理して文章再構築

“Sleeping and Dreaming” (L7) は、睡眠について、人間と動物の違い、そのメカニズム、夢との関係、快適に眠るポイントなどを科学的に論じた説明文で、「的確に理解し、適切に表現する力」を鍛える好材料です。

「的確に理解」については、各パート冒頭の lead question に対応した記述を検索し、表や図の形式で整理させました。一方、「適切に表現」については、自分で整理した図や表を使って、まとまりあるパッセージを再構築させました。

例えば Part 2 では、「睡眠にはどのような段階がありますか」という lead question が示され、本文としては、第1パラグラフの Sleep has five stages ... Different stages of sleep are repeated

throughout the night. という一文に続き、睡眠の5段階が紹介されていますが、うっかりすると、本文で紹介されている順番に第1段階→2→3→4→REM→1→2...と誤解してしまいます(正しくは下図のように1→2→3→4→3→2→REM→2...という stroke が繰り返される。)
「的確に理解」するために、教科書に掲載された図を参照しながら、別途、流れ図に key phrases を書き留めて、改めて短い文章にまとめます。



◀・タスク活動につなげる準備

life-like task を設定して「教科書で学ぶ」ためには、1文の分析的な理解、新出語句や文法などの応用練習、英問英答、反復音読など「教科書を学ぶ」過程も疎かにはできません。

各パート見開きの右ページの内容理解やターゲット文法を確認する Answer it! や Check it!, 別冊の『学習ノート』, 指導用 CD-ROM 収録の「授業プリント集」, 「評価問題集」などに組みませる他、プレゼンテーションソフトを利用した自作の提示材料を使っています。自作と言っても、テキストや音声は、指導用 CD-ROM や音声 CD の素材にアニメーション効果でちょっと加工するだけです。比較的容易に作成できます。

各課題材に応じたタスクを設定すること、デジタルコンテンツを上手に活用することが、「教科書で4技能をバランスよく育てる」につながるのではないのでしょうか。

(ふかざわ く にひろ・静岡県立駿河総合高等学校教諭)

4技能評価のためのタスク実践例ー教科書にひと工夫

藤田義人



Compass English Communication II, Lesson 3 “Cooking with the Sun” は、太陽光を熱に変える調理器具ソーラークッカーの仕組みと意義を述べたレッスンである。この課を題材として、4技能タスクの実践例を紹介する。特にタスクの実施場面を限定しないが、授業中の活動の1つとして、あるいは定期考査としても応用可能と考えられる。なお、副教材の1つである『学習ノート』も適宜使用した。それぞれの勤務校の状況に応じて応用していただけると幸いである。

＜リスニング評価タスク例＞

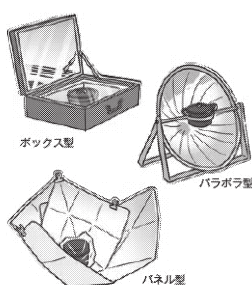
Lesson 3 Part 2 は3つの種類のソーラークッカーを紹介している文章である。ここではALTに依頼し、本文をベースに放送原稿を作ってもらい、次のタスクを実施する。

タスク：

あなたにはソーラークッカーを欲しがっている友達がいます。テレビショッピングを見て、友達にふさわしいソーラークッカーを勧めましょう。

●友達の健太：安いのがいいな。

●友達のさゆり：いろいろ調理できるのがいいわ。



times rely on parabolic solar cookers for all their cooking needs. They use the highest temperatures and must be handled with care. Of course you might be interested in our oldest and most popular style. Promoted in India by the government in 1982, the box cooker is a classic. (以下略)

テレビショッピング、欲しがっている友達の存在など、ちょっとした工夫で authenticity を意識させ、活動へ取り組む姿勢を高めている。なお、『学習ノート』にもリーディングバージョンとして以下のように同じような問題がある。(それぞれのタイプのソーラークッカーが向いているか教科書本文を読んで答えさせる。)

Saki : I want to cook as quickly as possible.

Takuya : I need a solar cooker which is familiar to many people.

Mandy : I don't like one that is difficult to use.

＜スピーキング評価タスク例＞

Lesson 3 の課末に用意されている Review は次のようなインタビュー形式なので、スピーキングタスクとして活用する。

Q(教師) : How does a solar cooker work?

A(生徒) : A mirror or reflective panel concentrates (1.) into a small area. A black pot absorbs the concentrated sunlight and turns it into heat (2.). (以下略)

＜TV ショッピング原稿＞

We are running a solar cooker campaign. There are three types of solar cooker for you to choose from. Are you interested in a parabolic cooker? People in Indian and Vietnamese villages some-

生徒は原稿を音読する。このとき空所を補充しながら音読させることで少し負荷をかける。ただし、これで終わるとスピーキングの要素が少ないので最後にひと工夫する。それは Review に記載されている原稿の音読が終わったら、最後に教師が即興で次のような質問をするというものである。

Q: What do you think is one disadvantage?

Q: Which solar cooker would you like to use?

こういった質問をすることで生徒との会話が生まれ、生徒のスピーキング力を試すことができる。音読部分では発音・イントネーションなどの accuracy を評価することとし、最後の質問への解答は fluency を評価することとして実施すると評価のバランスがとれる。

＜・リーディング評価タスク例

Compass はパート毎に見開きで構成されているので、1時間ごとの指導がしやすいという利点があるが、この利点ゆえに、まとまった量の文章を一度に読ませるといことが教科書そのものでは難しい。この点を解決しているのが『学習ノート』の「まとめ」のページである。ここでは1レッスン分の本文がまとめて掲載されており、その迫力に圧倒される生徒もいるかもしれないが、是非挑戦させたい分量である。

実際の例は『学習ノート』を参考にしていただきたいと思うが、指導用 CD-ROM 所収の「教科書本文」デジタルデータを利用して、B4判に印刷するなどしてひと工夫したオリジナルの問題を作ることも可能である。定番の、1) 虫食いの英語の要約文を用意し完成させる、2) 代名詞や副詞の内容を英語で答えさせる、3) 適切な文を空所に入れる、といった加工に加えて、4) 本文をすべて肯定文（あるいは否定文）にして、不適切な箇所を指摘させる、といった出題も作成が楽

で、その上読解力をそれなりに測れていると感じる。初見題材にふさわしい出題形式、既習題材にふさわしい出題形式にできる限り注意を払い、出題するようにしている。

＜・ライティング評価タスク例

『学習ノート』のまとめのページには当該レッスンで学んだ文法事項を用いて取り組む和文英訳問題が掲載されているので、これを利用してライティング力を評価することも可能であるが、和文英訳で測れるライティング力は限定的であるので、ここでも教師側のひと工夫が求められる。

近年の技能統合を意識した指導や、外部試験のライティング問題を考慮し、ここでは本文の内容を踏まえたライティングに取り組ませる。例えば次のようなお題（英語・日本語どちらでも可）が考えられる。

Part 1: ソーラークッカーとは何ですか？

Part 2: あなたはどのソーラークッカーがほしいですか？

Part 3: ソーラークッカーの問題点を2つ推測しなさい。

Part 4: 先進国でソーラークッカーは普及すると思いますか？

分量は生徒の状況に応じて調整する。またライティングタスクの前にスピーキング活動を行い、アイデアをクラスで共有してから、ライティングタスクに取り組むこともある。（蛇足だが、外部試験の導入が本格化するにあたり、ライティング指導に加えタイピングの指導が必要になると最近強く感じている。）

* *

今後も教科書や副教材にひと工夫加えて、目の前にいる生徒の英語力を伸ばしていきたいと考えている。

（ふじた よしひと・秋田県立横手清陵学院中学校・高等学校

教諭）

Departure

English Expression

「書く力」から「表現する力」へ

山本万紀子



◀ Departure I を使用した英語表現 I の授業

“Why are you so polite to your seniors even if they are only one year older?” “I think seniors have more experience, so we have to respect them.”

生徒が活発に意見を交換しあう声が聞こえてきます。Departure English Expression I の Lesson 17 を使用した授業の 1 コマです。Departure I には生徒が自然と自分の意見や考えを表現できるような仕掛けが毎レッスン用意されており、授業中のコミュニケーション活動の量が飛躍的に増えました。

本校では、1 レッスンに大体 3 時間かけており、具体的な手順は以下の通りです。

1 時間目

- ・冒頭のモノログを利用したリスニング・スピーキング活動による本課の導入
- ・Expressions の音読や Get More Informed などによる target grammar の導入

2 時間目

- ・宿題として解いてきた Get Ready to Express Yourself や Give It a Try の簡単な解説
- ・Challenge! による実践的スピーキング練習
- ・Listen Up によるリスニング演習

3 時間目

- ・Speak Up によるスピーキング演習
 - ・Write on Your Own によるライティング演習
- 文法問題の解説は解答を配ることで最小限に抑さえ、3 時間のどの授業でも必ず生徒が活動する場面を設けるようにしています。

3 時間目で Write on Your Own よりも先に

Speak Up を行うのは、与えられたトピックについてまずは不完全な英語でもよいので即興で話し、その後同じトピックでパラグラフ・ライティングを行うことによって、話している時になかなか出てこなかった単語を調べたり文法的なミスを直したりして、より正確な英語で表現できるようにするという狙いがあります。

◀ 段階を踏んだライティング指導

Departure I を 1 年間使用して、最も手応えを感じているのはライティング指導です。各レッスンの最終ページにある Write on Your Own ではレッスンで扱ったトピックについてまとめた分量のパラグラフを書く活動が用意されています。入学当初は 2～3 文書くのがやっとだった生徒たちが、今ではスラスラと 80～100 語程度の英文を書いている姿には今までに感じたことのない感動を覚えました。

突然「〇〇について～語で書け」と言われても難しいですが、本校では Speak Up で先にアイディアを出させ、Get Ready to Write でそのアイディアを深めることによって、ある程度パラグラフの内容を準備させてからパラグラフ・ライティングに入るので、生徒は無理なくまとめた分量の英文を書く活動に入っていくことができます。

また、Lesson 1 では「50 語程度」だった条件が、60 語、70 語と徐々に増えていき、教科書の終盤では 100 語程度にまで増えています。これにより、生徒は無意識のうちに英語でたくさん書くことに慣れていき、短い時間でまとめた分量の英文が書けるようになりました。

◀・・外部検定試験などによる成果の検証

ライティング能力の向上は、外部検定試験の結果によっても明らかです。

今年度から、1・2年生の全生徒に GTEC を受験させ、読む力、聞く力、書く力を観点別に測る取り組みを始めました。Departure I を使用している1年生が7月に受験した結果は以下の通りです。

〔観点別グレード 1年生約400名 7月〕

	本校平均	全国平均
トータル	3	3
リーディング	3	3
リスニング	3	3
ライティング	4	3

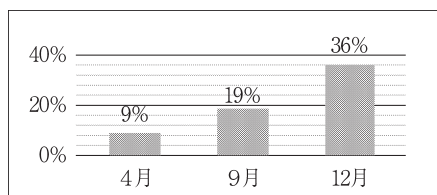
〔ライティングスコア成績分布グレード4以上〕

グレード	単純	累積 (人)
6	0	0
5	22	22
4	318	340

この結果からわかるように、リーディングやリスニングに比べてライティングの方が1つ高いグレードを得ることができました。また、成績分布を見ると約8割の生徒がグレード4を獲得することができており、一部の生徒だけでなく全体的に書く力がついてきていることがわかります。

また4月、9月、12月に生徒に対して意識調査を行いました。下のグラフは、「英語で自分の考えや意見を書くことができますか」という質問に対して「手順や段階を踏めば、80語以上のまとまりのある英文を書くことができる」と答えた生徒の割合の変化を示しています。

調査をするたびに割合が上がっており、生徒た



ち自身にも「書けるようになってきた」という実感が湧いてきていることがわかります。

◀・・スピーキング・リスニングの指導

その他の Departure I の特長として、リスニングで扱った教材を利用してスピーキングの練習につなげることができる点が挙げられます。例えば、レッスン冒頭にテーマに沿ったモノローグがついているので、それを聞いた後で同じテーマに関して自分自身の考えなどを伝え合う活動を通してレッスンの導入を行っています。

また2時間目に行う Listen Up でもレッスンのテーマに関連した英文を聞くので、それを聞く前後に内容に関して意見の交換をさせています。これによって内容がより深く理解でき、その後の定着にもつながることを期待しています。

また、Departure I を利用してスピーキングのパフォーマンステストも行いました。1学期は自作のスクリプトに基づいた「Show & Tell」を行いましたが、即興で自分の考えを表現できるようになってほしいとの願いから、2・3学期は「自由会話」という形式をとりました。授業で扱った内容から2学期は Travel (Lesson 8) などの身近な話題、3学期は Environmental Problems (Lesson 6) など少し難しめの話題から4つずつテーマを選び、生徒にあらかじめ提示しておきます。生徒はテスト当日に誰とグループを組むのか知らされ、くじで引き当てたテーマについて5分間自由に話し合うというものです。テストの準備をする際、生徒たちは関係する語彙や表現がまとまっている巻末の Vocabulary Board を参考にしていました。

＊

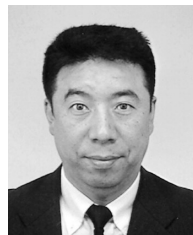
新年度から Departure II の使用が始まります。こちらでは Presentation や Debate など、より実践的なコミュニケーション活動が扱われているので、どんな授業ができるのか今からとても楽しみです。（やまもと まきこ・愛知県立刈谷北高等学校教諭）

Departure

English Expression

コミュニケーション活動で文法力も伸ばす

麻生雄治



新科目の「英語表現」が導入されて2年が経つが、どのように授業を展開すると学習者の表現力は効果的に育成されるだろうか。本稿では、教科書を十分に活用し、実際に表現力育成において成果をあげつつある、筆者の前任校（大分県立大分上野丘高等学校）での取り組みを紹介したい。

◀・・指導の基本コンセプト

- (1) 理解→暗唱→表現のサイクルで、最終的には自分の意見や考えを英語で自由に表現できることを目指す。
- (2) 教師が一方的に教え込むのではなく、生徒の自学を促すよう、学習者中心の学び合う授業スタイルを構築する。
- (3) ペア活動やグループ活動を多用し、表現する機会をできるだけ多く与え、「使える」という実感と自信を持たせる。
- (4) 単純に書くだけ、話すだけの活動ではなく、聞いて（または読んで）書く（または話す）、話して（または聞いて）書く、あるいは書いて話す、のように技能を統合した活動を多用する。
- (5) 時間を計測しながら（例えば1分間に何語話せるかの計測や、70語を15分で書く、あるいは100語を20分で書くといった timed writing など）活動に取り組み、即興性や瞬発力を鍛える。

◀・・導入のモデル英文

Departure English Expression I では、各課の最初にモデル英文がある。ここでは音声 CD の英文を聞き、聞き取れた情報をペアの相手に英語で伝え合ったり、あるいは全文を3～4回聞く間に

できるだけ多くの英文を書き取ったり（全文ディクテーション）することで内容を確認する。これによりその課で学習する内容（環境、健康、旅行など）の理解が促進される。

◀・・Get Ready to Express Yourself

語（句）整序問題、空所補充問題に続いて、与えられた場面でどのように英語で表現するかを練習する Challenge! がある。この部分は、これまでの「ライティング」教科書であれば和文英訳問題になるが、この教科書では場面に応じて自分の言いたいことを自由に書いたり話したりする活動になっている。本書の特長の1つとも言えるこのタスクは、コミュニケーション能力育成の観点からも効果的であり、また授業が盛り上がるおもしろいところでもある。書くだけ、話すだけでも可だが、書いたあとに話す、あるいは話したあとに書くとも効果も増すだろう。

◀・・Get More Informed / Listen Up

空所や下線を埋めたり表を完成させる設問は、どうしても解答を補って終わりという無味乾燥な課題になりがちであるが、単なる空所補充問題としてではなく、モデルとなる英文を参考にしながら自分の立場で意見、感想、説明などをペアや全体に対して発表する活動にしている。例えば、Lesson 8 の旅行の話題を扱う課では、図書館やインターネットで世界遺産について調べ、その特徴や魅力についてグループごとにプレゼンテーションする活動を行った。生徒が発表する（活躍する）場を作ることは大切である。

◀・Write on Your Own / Speak Up

自分の考えを自由に表現できるこの部分が「英語表現Ⅰ」のいわば醍醐味である。しかもこの2つの活動はうまくリンクしている。つまり、パラグラフ・ライティングのあとにそれをペアによる対話形式で伝え合うことができるように仕組みられている。また、書いた英作文をもとにその内容を口頭で発表したあと、その内容に関して司会者が質問を投げかけ、その他の生徒が答えるというインタビュー活動にしてもおもしろい。英語を話す際には、1分間で何語話せるかを（パートナーが）ワードカウンターで計測し、流暢性を高める練習をしている。発話語数は毎回記録することで、もっと話し続けようという動機づけとなっている（ワードカウンターについては今年の全英連大分大会の公開授業の中で紹介される予定である）。

自由英作文の誤りに関しては、相互で誤りを指摘したり（ピア・レスポンス）、教師（JTEとALT）が、冠詞や三単現のsの誤り（mistake）の指摘ではなく、内容や構成、表現、語彙使用に関する誤り（error）を助言・指摘したり（教師フィードバック）することで対処し、それをもとに書き直す（revise / rewrite）ようにした。

◀・時間配分

教科書の各課を概ね3授業時間+αのペースで進行すると、週2時間の「英語表現」の授業で全課を1年間で扱える。全課を通じて規則的に授業を進めるより、生徒の興味・関心が高い部分は書いたり話したりする時間を通常より多くあて、じっくり取り組むほうがよい。修学旅行がオーストラリアでのファームステイということもあり、滞在先での会話練習をかねて、日本の文化や習慣についてはかなり時間をかけて取り組んだ。

◀・文法の取り扱い

「英語表現」の導入にともない、授業時間内の文法の明示的な指導を排除した。これまで文法参

考書と準拠問題集を利用し、文法の説明にかなりの時間を割いたが、週4時間の「ECI」と週2時間の「英語表現」では文法の詳細な説明をしないことにした。代替として、朝学習（週に1.5回、年間約50回、1回は40分間）で、文法参考書の準拠問題集をもとに基本的な部分のみの説明と演習を行った。文法指導の比重を軽くし、その分、表現練習の比重を大きくしたことにより、表現力はかなり強化されている。また、懸念された文法力もこれまでどおり着実に力をつけている。

◀・授業の成果

具体的な成果について述べるのは難しいが、全国模試やコミュニケーション能力テストにおける成績では例年以上の伸びを見せている。ファームステイでお世話になった方々との別れ際に、涙しながらも生き生きとコミュニケーションしている生徒の姿を見ると、英語によるコミュニケーション能力は確実に向上していると言えるだろう。

◀・今後の課題

これまで流暢性と正確性を高めるための活動（練習）を多く実践してきたが、さらに英文の熟達度を高めるという観点から、センテンス・コンバイニング（筆者の知る限り、センテンス・コンバイニングを詳細に扱った教科書はないと思われるが）の技術を活用するなどして、英文の複雑性を高める指導も取り入れたい。

◀・おわりに

最後に蛇足になるかもしれないが、大分上野丘高校の英語科は同僚性が高い。各学年の担当者の足並みがそろい、みな同じ教材、方法、評価で指導する体制ができている。生徒の英語力向上とあまり関係がないようにも思えるが、最近、これも大切ではないかと思えてならない。

（あそう ゆうじ・長崎県立大学講師）

Departure

English Expression

「表現力」と「論理的思考力」を伸ばす

三仙真也



◀・・「思考のルーティン化」を通じて

Departure English Expression II では Part 3 以降すべての Part を通じ、「ブレインストーミング」にはじまり、「構成」や「肉付け」に加え、「エッセイ・ライティング」や「発表」にいたるまで“ルーティン化”されています。これにより、生徒の思考プロセスが明確になり、ダイレクトに表現力の育成につながります。生徒にとって見通しのきく言語活動になるとともに、あらゆる活動が適切な負荷となりえるからです。

2年間本校が指定を受けた文部科学省「英語力を強化する指導改善の取組」や同省での実践発表を通じて私が痛感したのは、英語科内でのチーム意識に加え、指導方法や目指す学習者像の共有の必要性でした。*Departure II* を用いることはこれらを可能にし、またアイディアを制限することなく論理的なパッセージ・ライティングや意見を交わす活動につながられる点で大変有効です。つなぎ言葉やディスコースマーカ―に着目してライティングをしたり、自分のライティングを客観視してリライトしたりする活動により、生徒の表現力は確実に伸びていると確信します。本稿では *Departure II* を用いて私がどのような活動を行ったかを、Part ごとに分けて3つ紹介します。

◀・・Part 3 Expressing Opinions 「社会問題 “教員の入学式参加について” パラグラフ・ ライティング」

Part 3 では自転車免許制や外国語学習など、やや社会的な内容についても論理的に構成し、賛成・反対の両方の視点から書くことが求められま

す。本校が作成した「学習到達目標（CAN-DO リスト）」においても、「社会性の高いテーマについて読む・スムーズな流れの文章を書く」ことを目指して到達段階を具体的に数値として設定し、その達成のために授業を組み立てています。

私は授業に必要な視点は授業中のタスクがいか

に生徒にとって relevant であるかだと考えています。もちろん関連づけるための意識付けや工夫も重要ですが、いかに教材が生徒に近いもので、考えを刺激しうる題材を選択するかが、最終的な言語活動の充実、さらには我々英語教員が生徒に「つけさせたい力」の定着度を決定する重要な要素であると考えます。

この点をふまえ、授業では「教員が新担任となる学年の入学式を欠席して、子どもの入学式に参加することの是非」を取り上げ、英字新聞の記事を読み込むインプット活動ののち、意見をブレスト、関連付け、構成…と *Departure II* の学習に沿った授業を行いました。ディスカッションを行い、最終的に賛成・反対のいずれかの立場でのパラグラフ・ライティングを課しました。

教科書外の題材から持ち込んだ内容でしたが、生徒は *Departure II* のプロセスで慣れた方法で自分の意見を構成しました。教職員を親に持つ生徒も多いため、生徒の課題に対する relevance が非常に高く、生徒同士でも発言を集中して聞く姿勢が見られました。ある生徒の「教員である前に親なのだから参加すべき」という意見に対しては、教員を親に持つ生徒が「教員の仕事は他の生徒も自分の子どものように接する。それを子である自分も受け入れているし、教員は彼らを優先す

べきだと思う」と英語で発言をしました。難しい論題を生徒がインタラクショを通じて英語で論理的に発言することができました。

◀・Part 4 Presenting Opinions「タブレットを用いた図表・グラフプレゼンテーション」

Part 4 では、Part 3 で得られた論理的に書く力を生かして、資料やエピソードを示しながら自分の考えを発表することが求められます。発表者としての注意点も明確に示され、これまでのプロセスにしたがって考えを書き、推敲した文章を分かりやすく伝えることに留意させました。

使用した題材は福岡県立大学の2010年度入試問題の小論文「ワーク・ライフ・バランスについて」です。グラフや図表など10種類ほどの資料をもとにして要約を課す特徴的な問題ですが、Part 3 でグラフ資料を扱った経験を生かして、内容を英語でリテリングする活動を行いました。タブレットは自分なりに分かりやすく書いたり色を塗ったりしたグラフを写真に撮ってピンチアウトで拡大したり、前後のページもフリップで自由に行き来できるため、生徒にとっても伝えやすいと好評でした。事前のリハーサルでは自分のリテリングの様子をビデオに収録し、デリバリーに注意し、より魅力的なプレゼンになるように工夫させました。

その後は「仕事を優先すべきか家庭を優先すべきか」について即興でのディベート。政策論題ではなく、両方の長所・短所を考える必要があり、議論は複雑になりました。しかし *Departure II* で説明されている留意事項を全員が理解し、ペアワークをインプットとして利用できたことで最終的なディスカッションも白熱したものとなりました。

このように、入試問題としての演習を特別に設けるのではなく、小論文への応用も含めて日頃からコミュニケーション能力の伸長を重視しつつ様々な題材を扱うことで、結果的に入試にも対応できる（例えば自由英作文も論理的に書くことが

できる）表現力と論理的思考力が身につきます。

◀・Part 5 Exchanging Opinions「モデレーターを活用した即興パネル・ディスカッション」

本校の国際探究科2年生は「体育祭は6月開催にすべきである。是か非か」という論題で英語ディベート学習を行いました。非常に relevance の高い活動として、論理的思考力と英語の表現力を伸ばすことができました。

この活動をふまえてさらなる表現力の伸長のため、Part 5 を参考に、本年度の高校生英語ディベート大会のテーマである「原子力発電所廃止の是非」などについて即興で相手の意見をまとめて反駁するというパネル・ディスカッションを行いました。相手の意見をまとめたうえで、反駁の要素・根拠を明示して論を述べるようにしました。

また、ここでは特にモデレーターの役割を重視し、司会的役割だけでなく、AFF (affirmative)/NEG (negative) の双方の意見をまとめて相手側に反駁を促したり、グループの中で発言者を均等に割り振ったりと、議論が円滑かつ活発に行われるようにしました。

これら AFF/NEG の立場に加えて、中立的かつ相当の英語力を必要とするモデレーターの役割を交代で行うことで、attack, defense, summary のような形式を重視した英語ディベートとはまた異なる、即興性が高いなかで論題を様々な側面から分析する力のつく授業を展開することができます。

◀・おわりに

「生徒の思考を予測できることが大切」。恩師の言葉です。自分の意見を持ち、論理的思考力を用いて考えた内容を、豊かな表現力で伝える…。3年間で培うべき力を、そして我々英語教員が行うべき授業のあり方を、*Departure* は示してくれていると思います。

(さんぜん しんや・福井県立若狭高等学校教諭)

ジーニアス英和辞典 第5版

南出康世 編集主幹

B6 変型判・
2,496頁
本体3,500円＋税

[評者]
布川裕行



思わぬ発見満載の地道な大改訂

新しい辞書を手にしたら、装丁や見易さを確かめながら、まず relevant という単語を引くことにしている。「重要な」という意味が載っているかどうか調べるためだ。『ジーニアス英和辞典 第5版』(G5) の場合、装丁も定義も合格だ。外見はキープコンセプトながらGのロゴがお洒落、厚さもレイアウトも5,000語、200ページ以上増えたのを全く感じさせない。件の語義については、英和には珍しくG2にはすでに「(実際の) 価値 [重要性] を持つ」が採用されて現在に至っている。

さて、今回の改訂でG5は実は大きく改良されている。そもそも学習英和には十分な受容語彙とともに、発表語彙を深く掘り下げ、大学入試に耐える語法的、文法的、語用論的な情報が必須となるが、その点、G5では高校学習語4,300語の8割方で語義や語法の見直しが行われているように思われる。まず、actually では語義が2つから4つに増え、よりびったりとした訳が可能となった。few の語法は2つに分割され、よりきめ細かでわかりやすくなった。反対に fish and chips の語法では余計な部分がばっさり切り捨てられた。文法面では different than

や「現在完了と just now」などにさらに一步踏み込んでいる。さらに「should＋原形」と仮定法現在についての解説も英語史に基づき正確に記述されている。以上、ほんの1例だ。

今回私が最も注目したのは新設された「コロケーション＋」だが、中でも information が圧巻だ。idea, grade, call, problem など、並のコロケーション辞典顔負けの内容となっている。他に、特筆すべき点では、大文字の But の使用に関する語用論的情報が私にとっては新しかった。

発音情報は従来からジーニアスの独壇場であったが、G5もそのDNAをしっかりと引き継いでいる。often をはじめ、either, neither などの解説では、英語は生きていることがまざまざと実感できる。

教室では、まず教師が辞書をよく使い込んで、そこで得た思わぬ発見 (serendipity) の数々を生徒に伝えてあげたいと思う。検索性を重視するなら、やがて出るであろう電子版を待つことになるが、一覧性など紙の辞書の良さは捨てがたい魅力だ。10万項目もある辞書は高校初学者には無理だという向きもあるが、収録語の少ない辞書は、現時点では深く掘り下げるべき発表語彙の情報もまた大きく割愛されていて、大学受験を前提とするならお勧めはできない。

コアとなる高校レベルの語に真摯に地道な検討が加えられ、これまで以上に serendipity に満ちた辞書に仕上がった G5は、授業や研究で大いに活躍するはずである。心からお勧めしたい。

(ぬのかわ ひろゆき・

山形大学ほか非常勤講師)

英語教師のための コーパス活用ガイド

赤野一郎・堀 正広・

投野由紀夫
編著

A5判・256頁
本体2,000円＋税

[評者]
日臺滋之



優れた実践的コーパス活用指南書

本書はコーパスを授業に活用できるアイディア満載の書です。

基礎編では、コーパスを扱う際によく耳にするコンコーダンサーや、KWIC といった用語について丁寧に解説されています。コーパスから得られるコロケーション(語と語の相性) 情報を用いることで生徒に類義語の意味の違いを説明する方法は参考になります。

実践編1: 汎用コーパスでは、Corpus of Contemporary American English (COCA) の検索方法がわかりやすく述べられています。例えば「動詞の experience と名詞のコロケーションを検索する場合」、つまり、experience の名詞ではなく動詞、それも変化形 experiences, experienced などを含めて調べる、また experience の「後ろ〇語まで」に来る「名詞」を調べるためにはどう設定すればよいか丁寧に記されています。さらに、ワイルドカード(*)を用いて、LIST モードで、What で始まる感嘆文をはじめ、9項目の文法項目を検索する入力方法も示されており重宝します。

COCA 以外にも、BNCweb を利用した British National Corpus (BNC) の検索方法が述べられており大変参考になります。

実践編2：学習者コーパスのJEFL Corpusでは、生徒が英語で表現できなかった語句に[JP]タグが付与されており、生徒がどのような語句を表現できなかったかがわかり興味深いものです。

実践編3：自作コーパスでは、中学の検定教科書を用いたAntConcのコンコーダ機能、共起語、単語連鎖の調べ方、単語リストの作り方、また新旧の教科書を比較し特徴語リストを作成する方法も示されており役立ちます。

AntWordProfilerによる教材作成では、テキスト内の単語をGeneral Service Listの語、Academic Word Listの語、それ以外の語と色分けし、難しい単語を、類義語辞書機能で易しい単語に書き換える操作が示されています。これは、リーディング教材や試験問題の作成で難語を書き換えて読みやすくするのに便利です。

実践編4：英作文指導でのコーパス活用では、Googleの検索でフレーズ検索、OR検索、アスタリスク検索等を工夫し、生徒に課した英作文の添削を効果的に行う実例が示されています。また、英作文指導でAntConcのn-gram機能を使うことで、繰り返し使用される表現を特定し、別の表現に置き換える例も示されています。

発展編では、ワードの文章校正のオプションにある「読みやすさの評価」を活用し、学校で使用している教科書の英文が、他の教科書や入試問題で使用されている英文とどの程度、難易度が違うのか比較する術も示されています。

本書の実例はすぐさま授業や研究に役立ちます。是非お試しあれ。

(ひだい しげゆき・玉川大学教授)

ゴーストを訪ねる ロンドンの旅

平井杏子 著

A5判・224頁
本体2,300円＋税

[評者]
井内雄四郎



ロンドンのゴーストを探り、 英国史の本質に迫る必読の一冊

ロンドンに来てすぐに気づくのは、この風格のある古都の各所に現われる多くのゴーストたちの存在だろう。

本書は全8章から成立し、ウェストミンスターから郊外のウィンザー城に至るロンドンの各地に出現するゴーストたちが的確でテンポの速い才筆によって語られていき、挿入された沢山の写真や図版とあいまって、実に楽しい貴重なロンドン案内となっている。

まずは大晦日の夜、大勢の観客を前にウェストミンスター橋からテムズ河に飛びこんで皆を驚かせる、かの有名な十九世紀の切り裂きジャックのゴーストをはじめとして、傍らの国会議事堂に現われる国事犯ガイ・フォークス、ホワイトホルのチャーチル元首相、ロンドン塔ではエリザベス一世のかつての寵臣サー・ウォルター・ローリー、自らの切り落とされた首を抱えて歩くヘンリー八世の二番目の妃アン・ブーリン…と多くのゴーストが紹介され、最後に郊外のウィンザー城で目撃されるエリザベス一世の威厳にみちた姿が登場して、本書はその多彩な幕を降ろす。

しかしここに登場するのは何も

国王やその妃、貴族、著名な政治家のゴーストだけではない。例えば、かつて食肉市場のあったスミスフィールド付近には、十六世紀カトリックのメアリー一世によって火あぶりにされた数百人のプロテスタントの唸き声が風に乗って聞こえてくるというからすさまじい。人間ばかりでなく黒犬のゴーストさえ現われるというのだから、さながら英国の歴史の血なまぐさい暗黒部を目撃するようなものだろう。

ところがふしぎなことに、ここに登場する多くのゴーストの中には、ヘンリー八世の妃たちのように随分現世での非道な仕打ちに恨みをもって死んでいった人物たちもいたはずだが、意外なことにここには我国の怪談に感じられるような恨みや怨念がさして感じられず、むしろ彼らに対する英国人全般のなつかしさや親しみさえ感じられるのはなぜだろう。また今日に至るまで、これほど多彩なゴースト伝説が脈々と英国で語り継がれ、英国史の中で独自の地位を占めているのはなぜだろう。

この問いに著者は3つの理由を挙げている。即ち、今なお古い時代の遺構が残る英国ではゴースト出現の絶好の舞台が保存されていること、2つ目は英国人の歴史に対する深い愛情、最後に彼らの深いユーモア感覚とその寛容な心である。

英国の歴史と文化をこよなく愛する著者ならではの鋭い見解であり、「ゴースト」というきわめて特異な視点から英国史の深部に迫る好著として、ぜひ大勢の人々に読んでほしい注目の一冊である。

(いのうち ゆうしろう・

早稲田大学名誉教授)

大修館書店の本

◆文法指導の尽きぬ悩みにお答えします 英語教師のための文法指導デザイン

田中武夫、田中知聡＝著

(A5判・264頁・本体2,200円＋税)

◆新しい英語語彙指導を提案する

英単語運用力判定ソフトを使った語彙指導

門田修平、野呂忠司、氏木道人、長谷尚弥＝編著

(A5判・186頁・CD-ROM付・本体2,100円＋税)

◆英和辞典の決定版 新しいジーニアス！

ジーニアス英和辞典 第5版

南出康世＝編集主幹

(B6変型判・上製・函入・2496頁・2色刷・本体3,500円＋税)

◆一生に一度は読みたい、古今東西珠玉の名作への招待状 小説への誘いー日本と世界の名作120

小池昌代、芳川泰久、中村邦生＝著

(A5判・274頁・本体2,400円＋税)

[訂正] 本誌第54号(2014年11月)の「大修館書店 新刊 PICK UP」にて、『英単語運用力判定ソフトを使った語彙指導』の著者名に誤りがありました。正しい著者名に訂正したものを本欄に再掲いたします。お詫びして訂正いたします。 — 編集部

営業便り

平成27年度用の教科書、辞典、副教材を全国で多数ご採用いただきまして、誠にありがとうございました。▶私が沖縄県を担当してちょうど3年が経ちました。沖縄に行き、まず最初に覚えた方言が「ゆんたく」です。これはおしゃべりという意味ですが、みんなで楽しく会話するという意味合いだと思います。▶赴任して、沖縄ならではの感じたのは、ほとんどの学校でお昼休みは、先生方がみなさん、大テーブルを囲んで弁当を食べながら、楽しそうに会話をしていることです。これは学校の事務室でも同じです。▶これまで担当した他県ではこういう光景はなかったのですが、沖縄の方は人と人とのつながり、会話を大事にしているのだと感じました。毎日、ゆんたくして、楽しかったことや、ときには悩みをみんなで話し合っ、お昼休みを過ごす。そういう文化が受け継がれていることに感心しました。▶最近是人前でもスマホを触る、スマホ依存症が多いと言われていいます。これとは対照的な、ゆんたくの文化は本当に素晴らしいと思います。▶これから弊社の営業マンが、来年度の教科書の見本を各学校にお届けいたしますが、先生方のゆんたくのお邪魔をしないよう心がけて参りたいと思います。



(福岡支店 岡本正孝)

編集後記

▶代々木の国立競技場周辺の建て替えが次々と始まる様子を見ながら、東京オリンピック・パラリンピックに向けて東京の街も今後5年で大きく様変わりするのだろうかあと感じましたが、英語教育界においても、大学入試改革や小学校英語の教科化を含む学習指導要領改訂に向けて、これから数年は怒濤のような大変革が続くそうです。▶中でも、外部試験活用を含めた大学入試改革はかなりドラスティックな改革として注目を集めています。入試を「4技能統合」に変えることで、授業もそう変わらざるを得なくなることを狙っているのでしょう。本特集で紹介していたような、教科書を十二分に活用しながらも、生徒が4技能を使える授業が、今後ますます増えていくことを期待しています。(和)



お知らせ



小社英語教科書についてのご質問、感想などを小誌編集部宛にお寄せください。「G.C.D.教科書 Question Box」で随時ご紹介・ご回答してまいります。

また、小社教科書を使った授業の紹介などのご投稿(郵送のみ)をお待ちしております。(採否のご連絡は致しておりません。また、原稿はお返ししません。)

なお、小社ホームページには小社教科書の内容をご案内しているサイトがございます。ここでは、英語の先生方に役立つ様々な情報も提供しております。

<http://www.taishukan.co.jp/gcdroom/>

Genius・Compass・Departure

英語通信

第55号

2015年4月1日発行

(年2回発行)

編集人：©「G.C.D.英語通信」編集部

発行人：鈴木一行

発行所：株式会社 大修館書店

〒113-8541 東京都文京区湯島2-1-1

電話(03)3868-2293(編集部)／(03)3868-2651(販売部)

【出版情報URL】<http://www.taishukan.co.jp> [振替] 00190-7-40504

印刷・製本：文唱堂印刷株式会社

図本誌のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上の例外を除き禁じられています。本誌を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用であっても著作権法上認められておりません。